

子供の遊び

豊かな自然に囲まれた故郷は遊ぶ材料に事欠かなかった。四季夫々の伝統的な遊があります。庄内平野は北に出羽富士と称される秀麗「鳥海山」がそびえ、東には霊峰「羽黒山、月山、湯殿山」の出羽三山、南東には朝日・吾妻連峰が聳えます。その山々から日本海に向けて幾つかの河が流れて肥沃な大地を形成しております。鶴岡市の北を流れる一級河川「赤川」流域は一大農作地帯で庄内米や豊富な野菜・果実の産地になっております。

雪融けから春先にかけては①川べりの猫柳とりです。良い枝ぶりのものは急流渦巻く所に生えております。身を乗り出して切り取るのですが、かなり危ない事をしておりました。時たま河に足を突っ込んであわやという事が数度あった様に思います。勿論、下半身はびしょ濡れです。

②太めの柳の木で刀づくりです。大刀、小刀、槍など切れない道具を使って必死に作りました。チャンバラ、悪漢ゴッコの武器ですが、本当にビックリするほど上手に作る仲間が居りました。

③土手の雪が融けると悪がきどもが大人の目を盗んで野火遊びです。風向きによっては大事になります。堤の桜を焼いたとか列車を止めたとか、私のグループは消せる範疇での遊びです。

春から夏にかけては①近くの金峯山に良く登りました。小金口から登り、中の宮で参拝し頂上に向けての急坂(あぶら流し)を越えて頂上のお宮に参拝してから反対側の湯田川側に下山し、町営浴場で汗を流して帰って来る5里程のコースで勿論すべて歩きです。

ある時、蒨やワラビを採るため中の宮付近で横道に入っていたところ、竹やぶに孟宗竹の子が斜面一杯生えていたのです。早速、美味そうなものを選んで手で掘り下げて足で折るやり方で5~6本採り、リックサックに詰めれるだけ突っ込んで家に持って帰りました。途中、母親が喜ぶ顔を描きながら意気洋洋帰ったところ、母はじっと私の顔を見つめて「そこは金峯の竹の子畑だ」というのです。つまり盗んで来たということです。これから二度とするな・・・ということで落着。

数日間は竹の子汁などの孟宗竹の子尽くめでした。

②雑小魚(ざっこ)とりに夢中。子供の頃は田圃も畑も人糞や家畜の糞尿と藁で発酵させた堆肥(こやし)を雪のある間に農家の堆肥場から牛そりにのせて田圃や畑に運び雪融けと同時に施肥します。この時分の匂いが季節の変わり目、春の到来を告げることにもなります。

堆肥の養分が肥沃な土壌をつくり美味しい米や野菜を育て、同時に農水路に生息する雑小魚の栄養にもなっていたようです。どじょう、ザリガニ、ふな、ナマズ、イモリ、ゲンゴロウ、ヒル、川エビなど食べられない生き物も一緒に捕れました。家族のタンパク質補給に役立っていたと思います。温かくなるとパンツ一丁で堰に入り雑小魚を網に追い込みました。大きいどじょうをドンキと呼んでいました。父親のおかずになっていたように思います。当時は殺虫剤を殆ど使って無かったので雑小魚も一杯いたし安全・安心だったと思います。今は駄目になったそうです。

夏休みに入ると朝から夕方まで河原(赤川)に行って遊びます。

朝のうちは水も冷たいのでガラス箱とタモ、ヤリを使って石モチやカジカなどの小魚とりです。

大人以上に上手な友達がいて私の2~3倍は獲っていました。社会人になってからも各地の磯釣大会で名をはせていたようですが若くして男鹿半島の磯で大波にさらわれて亡くなったと聞きました。大物狙いで無理したようです。泳ぎは小学校に入る前から河原の水溜りで犬掻きからできるようになり、徐々に深いところや流れの速いところにチャレンジしていきます。何回も溺れかかって水を飲みのみ川幅の広い所の横断や上流から下流の目標地点までの河くだり、橋の欄干からオッカナビックリ飛び込んだり遊びには限がなかったようです。水泳パンツではなく6尺フンドシを締めてました。初級者は白フンで上級者は赤フンです。早く赤フンを締めたくて頑張りました。

秋になると磯釣りです。竿も自分で造ります。近所の竹藪から丁度よさそうな竹を4~5本採ってきて枝葉を綺麗に落として全体のシナリ具合を調整しながら愛用の竿が出来上がります。

その昔、藩主が磯釣りを奨励したとの事で釣り道具やも沢山ありましたし、庄内の釣り竿は有名でした。朝の3時頃に近所の仲間と合流して、6キロほど西よりの加茂の磯場について陽が昇る頃に始まります。釣れる時間帯が朝のうちと、夕暮れ時です。釣った魚は「くろこ、あぶらこ、うますら、とらふぐ、あじ、かます」等です。途中、握り飯を食べ友達の釣果を気にしながら粘ったものです。帰りはバスに乗れたり、歩きだったりで往きは良い良い帰りはコワイでした。

稲刈りが終わった田圃でのイナゴ捕りは学校行事でした。捕った量を自慢しあうのですが雄と雌が重なってお楽しみ中のものを捕りまくりました。今思うと随分惨い事をしたものです。

冬は重たい雪が結構降って屋根の雪下ろしの手伝いをしたり、カマクラを作ったり、落とし穴を作って悪戯したり、河原の土手で橇やスキーで雪だらけになって遊んでました。

配給で当たったミツウマのゴム長靴は最先端の防寒靴で兄のものでしたが眼を盗んでは履いて遊びまわっておりました。良く怒られたものです。ばばはん特製の甘酒はもの凄く美味しかったです。

何とも言えない甘さと喉越しで寒い冬の一番のオヤツでした。

「雪の降る街を」作曲家の中田喜直さんが鶴岡の知人宅に来た折に深々と降り積もるようすを見て、あのメロデーが出来たそうで毎年の音楽祭のフィナーレ曲になっているそうです。